13. 鼻アレルギーに対するヒスタグロビンのネビュライザー療法について

椿　茂和（国立王子病院）
斉藤一郎（日本通運病院）
渋井弘一、大柿　徹（あそか病院）
須貝六実（都立広尾病院）
藤森師雄（東京船員保険病院）

鼻アレルギー患者に対して5病院でヒスタグロビンのネビュライザー療法の共同治験を行った。

男33例、女39例の72例の症例を16才以上35例、15才以下37例に分け、16才以上についてはヒスタグロビンを1回に¼V、15才以下については1回1/10Vを投与した。

治療回数は12回とし、4週以内に終了することとした。他剤の併用は原則として行わなかった。

そして下記のような結果を得た。

総合判定では、¼V群で60%、1/10V群で67.6%、全体では63.9%の有効率であった。

病型別の有効率は、¼V群はくしゃみ・鼻汁型(87.5%)、鼻閉型(50%)、くしゃみ・鼻閉型(33.3%)、1/10V群は鼻閉型(80%)、くしゃみ・鼻汁型(73.9%)、くしゃみ・鼻閉型(44.4%)の順であった。総合的にはくしゃみ・鼻汁型(79.5%)、鼻閉型(66.7%)、くしゃみ・鼻閉型(37.5%)であった。

重症度別の有効率は、¼V群は重症例(72.0%)、中等症例(47.0%)、1/10V群では重症例(78.5%)、中等症例(63.6%)で、いずれも重症例により効果がみられ、¼V群より1/10V群の方が成績がよかった。総合的にも重症例(75.0%)、中等症例(53.8%)であった。

症状別の改善度は自覚症状については、¼V群ではくしゃみ(65.7%)、鼻汁(61.1%)、鼻閉(54.3%)、1/10V群では鼻汁(59.4%)、くしゃみ(56.7%)、鼻閉(52.6%)と両群であまり変らず、総合的にはくしゃみ(61.1%)、鼻汁(60.2%)、鼻閉(53.4%)で、鼻閉の改善度が他の症状より少し悪かった。

他覚症状の腫脹と水性分泌については、両群の間にあまり差はなく、腫脹の改善度は最も悪い。

効果発現までの期間は両群ともに2週以内に80%出現しており、1回使用量による変化は見られなかった。

ネビュライザーを12回行うのにかかった期間と効果の関係をみると、¼V群では僅かではあるが期間の短い方が良いという結果が出た。すなわち短期間に密度濃く行った方がよい。1/10V群でも同様の結果が出た。しかしあまり開きはなかった。

検査結果では、ヒスタミン固定能は著効、有効例では60.5%、稍効、無効例で50%に改善がみられた。ネビュライザーによりヒスタミン固定能はかなり改善される。

RASTによるD_2の反応は治療前後であまり変化は見られなかった。

血中好酸球数は治療前正常範囲（3%以下）であったものは治療後も正常範囲内にあり、治療前増多（4%以上）を示したもののうち22.2%は正常範囲になった。

1回¼V群の治療効果はすでに報告されているものに劣らない結果が得られ、1/10V群の治療効果も期待されるものが見られた。同時に行ったヒスタグロビン固定能値や血中好酸球値にも症状の改善を裏づける結果を得ることができた。